



ブレるということ



雲地草夫

ブレる体質とブレない体質

日本の政治の世界ではたびたび「ブレたら負けだ」「ブレてはいけない」などという言葉が叫ばれている。実はこれはあたりまえのことなのだ。政治は英語でpoliticsだ。これは、政治家がそれぞれのpolicy（ポリシー）を戦わせるという意味なのだろう。ポリシーを戦わせるのが政治なのだから、いったん決めたポリシーを曲げてならないのは当然のことだ。途中でポリシーを曲げてしまったら戦いにならない。自分で決めたポリシーがうまくなかったときは、その政治家は辞任あるいは降格することによって責任を取ることになる。

このことは、国政の世界に限ったことではなく、社内や教授会や同好会など人間の集まる場所、すなわち政治の発生する場所すべてにおいていえることだ。構成員たちのポリシーがブレまくっては政治ができない。

そして「ブレない」ことには利点がある。それは精神が健康に保てるということだ。ひとつのポリシーに固執するということは、精神に良い影響を与える。たとえ戦時下の「打倒アメリカ」とか今の「原発推進」とか「体罰容認」のように、ポリシー自体は極めて病的なものであったとしても、それを固く信じることによって精神を健康に保つことが可能である。逆に言うと、精神を病むタイプの人には、「ブレる」タイプの人なのかもしれない。

「ブレる」タイプの人には、ふと立ち止まる人だ。ときどき立ち止まっては、原発を廃止すべきなのだろうか推進すべきなのだろうか、体罰を続けるべきなのだろうかやめるべきなのだろうか。考え抜いて、今までやってきたことが良くないことだと思ったら、やめる勇気を持っている人だ。言い換えると、「ブレる」タイプの人には、常識を鵜呑みにせず疑うことのできる人だ。

「ブレない」ことによって健康に生きるか、「ブレる」ことによって不健康に生きるかは、個人の自由だ。ただ、気分が良いからといって「ブレない」自分に安住し続けていると、最後には戦争に負けたり、放射能汚染が起きたり、体罰の犠牲者が出たりして、取り返しのつかないところまでいってしまう。